

第67回 日本リウマチ学会総会・学術集会

記念市民公開講座

関節リウマチを正しく理解する

提供：アッヴィ合同会社

2023年4月29日（土・祝）開催 北九州国際会議場

「関節リウマチを正しく理解する」をテーマに、第67回日本リウマチ学会総会・学術集会記念市民公開講座が2023年4月29日、北九州市小倉北区の北九州国際会議場で開かれました。21世紀に入って進歩したリウマチ治療についての最新の正しい知識を学び、今後の治療のあり方を考える取り組みに約200人が熱心に聞き入りました。



講演 「関節リウマチ治療の過去、現在、未来」



一般社団法人日本リウマチ学会 前理事長
埼玉医科大学副学長、慶應義塾大学名誉教授

竹内 勤氏

重要なのは医師と患者さんが相談しながら服薬を続けること。そして一旦、寛解や低疾患活動性になったら、その状態を保ち続けなければいけない。それがポイントです。

※1- Schett G, and Moines I. NEJM, 365, 23:2205-19(2011) ※2- Smolen JS, et al: Ann Rheum Dis, 69, 4:631-637(2010)

リウマチは全身疾患 患者も評価、医師と治療目標を決める

関節リウマチでは、関節を覆っている滑膜に炎症が起こると新しく血管ができます。すると、本来身体を守ってくれるリンパ球が血管を通してどんどん出ていく。

そして関節の組織を細菌やウイルスと間違えて壊してしまい、痛みや腫れを引き起こし、最終的には関節を破壊します。

最近の研究では環境要因が大きいとされ、喫煙や歯周病、腸内細菌の乱れ、肥満などが挙げられます。さらに、感染症、骨折、妊娠・出産、強い精神的ストレスなどが発症の引き金になると言われています。医師はまず、滑膜の炎症を止めて、全身への影響を食い止めます。

推奨している治療の考え方としてT2T(Treat to Target: 目標達成に向けた治療)があります。患者さんと相談して治療目標を決めます。登山で言えば頂上である「寛解」を目指すのか、7合目にあたる「低疾患活動性」にするのかを話し合います。

診察のデモンストレーション 「体験！田中先生の リウマチ診察室」



○ デモンストレーター
田中 良哉氏

○ 患者モデル
坂口 綾子氏（公益社団法人 日本リウマチ友の会 福岡支部 支部長）

医師と患者 コミュニケーションを大切に

田中良哉氏がデモンストレーター、日本リウマチ友の会福岡支部長の坂口綾子さんが患者モデルになり、診察と診断、治療方針の決定をステージで再現しました。

田中氏は問診の後、肩や腕のつけ根、手足や指など計28カ所の関節を触り、痛みや腫れのある関節を確認しました。続いて、目の渇きや唾液腺、リンパ腫の腫れなどをチェック。さらに血液検査や罹病期間、患者さんの全般評価(VAS)など、坂口さん自身の詳細を参考に疾患活動性を評価しました。坂口さんは寛解を目指しており、田中氏が今後の治療方針について説明しました。

開会の挨拶



第67回日本リウマチ学会総会・学術集会 会長
産業医科大学 医学部第1内科学講座 教授

田中 良哉氏

21世紀に入って進歩
2023年4月24日から26日まで福岡市で、第67回日本リウマチ学会総会・学術集会を開催しました。コロナ後初の全面対面開催で、参加者は国内外から6000人を超えました。リウマチ治療は21世紀に入って進歩し、適切に治療すれば普通に暮らせる病気になってきました。でも、まだまだ皆さんに理解していただいているとは思えません。本講座を通じて、「何となく普通に暮らせる気がしてきた」という気持ちになっただければ幸いです。

閉会の挨拶

竹内 勤氏

今回の市民講座は第67回日本リウマチ学会総会・学術集会が主催しました。開会した4月24日までは私が日本リウマチ学会の理事長だったのですが、交代いたしました。新たに田中良哉先生が新理事長に就任されて、日本のリウマチ学会を牽引していただくことになりました。田中先生には学術集会のみならず、この市民公開講座を挙げていただきまして、このように多くの皆さまに視聴していただいて、診察のデモンストレーションも行っていただきました。

本セミナーの様子は、

こちらのWEBサイトから動画視聴が出来ます。

<https://yab.yomiuri.co.jp/adv/JCR2023-Rheumatology/>

※こちらのWEBサイトに関するお問い合わせは読売新聞西部本社ビジネス局まで【TEL】092-715-5847（電話の受付は平日9:30～17:30）※12/29～1/4はのぞく

